

Title	S・キルケゴールのアイロニー理解：その序論的考察のためのノートとして
Sub Title	S. Kierkegaards Verstandnis der Ironie
Author	大谷, 愛人(Otani, Hidehito)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1970
Jtitle	哲學 No.56 (1970. 10) ,p.21- 58
JaLC DOI	
Abstract	<p>Diese Abhandlung stellt sich die Aufgabe, die grundlegende Hauptlinie in S. Kierkegaards Verstandnis der Ironie aufzufinden. Seine Definition über den Begriff der Ironie kann man in Theses"seiner Magister-Dissertation Om Begrebet Ironi med stadigt Hensyn til Socrates (Kbh. 1841)" finden. Er schreibt: Ironia, ut infinita et absoluta negativitas, est levissima et maxime exigua subjectivitatıs significatio. Aber sein Verstandnis der Ironie vertiefte sich immer tiefer danach. Ich glaube also, man kann das bei vier Thesen vorstellen. 1. Die Ironie ist die unendliche und absolute Negativitat. 2. Die Ironie ist die Bestimmung der Subjektivitat. 3. Die Ironie ist das Zeichen der Tatsache, dass die Wahre ist. 4. Die Ironie ist die Bewegung der Innerlichkeit als die Charakter der Wahrheit. Ob man sich der Existenz der Ironie nicht bewusst ist, steht man da unter der Herrschaft der Ironie : die unendliche. und absolute Negativitat als der gottliche Wahnsinn. Kierkegaard zuredet uns also, sich die Ironie bewusst zu sein, und dadurch die Ironie zu beherrschen. Aber er andeutet, es ist dadurch möglich, auf dem tieferen Standpunkt Humor zu stehen.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000056-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

S・キルケゴールのアイロニー理解

—その序論的考察のためのノートとして—

大 谷 愛 人

は じ め に

筆者は目下S・キルケゴールの「著作活動の時代」の研究に集中している。この研究の究極目標が彼の各著作の思想内容の解明を通じて彼の思想の全体的構造を究明することにあることは言うまでもない。しかしその究極の作業にとりかかりうるためには、それに先だっていくつかの準備作業をしておかなければならない。しかしそれらの中にはその究極の作業にも匹敵しうる程の大作業を必要とする問題がいくつかある。ところでその一つが彼の全著作の構造と仕組の問題である。キルケゴールは測り知れぬ程深遠なる考量のもとにいと複雑で巧妙なる仕掛を全著作の構造に施し、それによって個々の著作は、全著作の中で、そしてまた他の相互の著作に対して、それぞれ特定の位置と機能と役割とをあてがわれているのである。この構造と仕組の秘密の中には、全著作の思想の謎を解く鍵がかくされていると言ってもよい程である。筆者が目下集中しているのはこの問題である。

ところでキルケゴールは彼の全著作をそれ自体本質的に「運動性」のうちにおいている。別の言葉で言うなら「生成」のうちにおいている。即ち、全著作は、それを構成している個々の著作が、そしてその個々の著作の相互関係が、そして更に全体そのものが、それに関かわる読者において、そしてそれらを書いた著者キルケゴールにおいて、そしてまた読者とキルケゴールとの関係において、彼の言葉で言うなら、弁証法的運動が起るように仕組まれている。否、それら自体が本質的に弁証法的運動の状態におか

れているのである。つまり、彼の全著作は、それを構成する個々の著作も、個々の著作の相互関係も、そしてその全体の構造が弁証法的に仕組まれているわけである。そこで問題は彼の言う「弁証法」という言葉の意味であるが、これは様々な意味を含んでいるが、端的に言うなら、両義性、二重性、遡及性、撤回性というような意味で、更にまたそれら全体を含めた意味での反省性を意味している。しかしここで最も注目すべき点は、彼はその弁証法を極めて高度にして深遠なる文学的ならびに哲学的配慮のもとに三つの素因をもって構成している点である。その三つとは「アイロニー」と「ユーモア」と「逆説」とである。これら三つのものはその弁証法の原理をなしているものと言ってもよい。従って彼の全著作の構造と仕組とを究明するには、まずこの三つのものの一つ一つを徹底的に究明することから始めなければならないわけである。そこで本稿ではまず「アイロニー」をとりあげるわけである。

しかしこの「アイロニー」という概念は（「ユーモア」及び「逆説」という概念もそうだが）、キルケゴールにおいては、単に著作構造の弁証法的な仕組に用いられただけのものではなく、彼自身の思想内容になっており、彼自身が徹底的に研究し、その研究によって哲学及び倫理学をはじめ他の学問や思想領域に劃期的な意義を投げることになった問題である。従ってこれらの概念を研究することはそれだけでも独立的な意義のある研究になるわけである。そこで、本稿の研究は、キルケゴールの著作構造の研究の一環をなすものとなるが、それとは一応独立した意味と資格とをもつものとして作業されたものである。

本稿の内容は主としてキルケゴールにおける「アイロニーの概念」の意味を彼の全著作にあたって整理しなおしたものであるが、本稿の研究は、次には、アイロニーの世界史上における現象形態の問題、更には、アイロニーのキルケゴール自身における現象形態の問題へとつながってゆくものである。

1. アイロニーという概念の問題性

「アイロニー」という概念は哲学史上いく度か言及されてはきたが、もしこれを他の諸概念と比べるなら、これはまともにとりあげられ正面きって論じられることのいたって少なかった概念であったことが知らされる。そのことは、何よりも現代までにこれに言及した思想家の顔ぶれとこれを考察した文献とをみれば明らかである。⁽¹⁾ それでは、この概念はそんなに値打のないものなのだろうか。もし本当にそうなら、哲学の歴史は正しかったわけである。しかしもしそうでなくこの概念は極めて重要な価値をもつものならば、哲学の歴史は大きな誤りを犯してきたことになる。この概念の価値の判定についてはこの研究（本稿だけの部分でなく、爾後の部分と更に「ユーモア」及び「逆説」の研究の部分までも含める）の終結をまっぴらしてはじめて下されることになるが、この結論だけを先きに述べておくならば、筆者としては、この概念は極めて重要な概念と考えるものである。否、アイロニーは、本文の研究において明らかにされるように、人間の認識の営みにおいても、生存の営みにおいても一瞬たりと雖も決して逃れることのできないもの、いやおうなくどこまでも関かわってくるものである。この意味において、この概念を研究することは極めて重要であると考えるのである。

けれども、この概念は、なんとも正体不明の、全くとらえどころのない「化け物」のようなものである。それはイメージとして浮べようがない。そこで何はともあれこの概念を考察してゆくに当たってはさしあたりせめてささやかながらもこの概念について何か手ごたえをつくっておくことが必要だと思う。しかしそれには、この概念の意味内容はともかく、まずさしあたりは、この概念が人の口から語られたり、書物の中で言及されたりするとき、その個々の時々の表面的な事柄はともかくとして、それらの全体に一応共通しているものとして、実際にはこの概念において何が問題

になっているのかこれを明らかにしておくのがよいと考えられる。つまり、「アイロニー」という概念は、それにおいて何が問題となっている概念なのかという問題である。

けれどもこの問題を明らかにするには、まずこの概念はいかなる学問領域において語られているのかということをはっきりしておく必要がある。この作業は当然に「アイロニー」という概念は本来はいかなる学問のいかなるカテゴリーに所属する概念かという問題に側面から考察をしてゆくことになる。さて、「アイロニー」という概念がそこにおいて語られる学問領域とは一応次の三つに認めることができると思う。

第一は、修辞学的領域である。アイロニーという言葉はそれが学問的概念である以上に日常において使い慣らされている言葉であり、それは何よりも「話し方の形式」、或は「言いまわし」に関して使われていると言ってもよい。従ってこの点からだけでもこの概念は極めて拡大された意味での修辞学的領域に属することが予知される。しかし学問的な意味においてこの概念の歴史的発祥地である古代ギリシアの場合を考えてみるに、例えば、ソフィスト、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの場合だけをとってみても、この概念が究極においては、哲学倫理学的概念として問題化されてはいるが、さしあたって扱われている領域は修辞学の領域である。けれども、ソクラテスの場合は言うまでもないが、常にソクラテスを念頭におきながらこの概念を扱っているプラトン及びアリストテレスの場合を考えてみるに、例えば、前者の『ソフィステース』篇、『ノモイ』篇、『国家』篇においても、後者の『レトリカ』、『ニコマコス倫理学』においても、アイロニーは、単に「話し方の形式」として扱われているのではなく、それを通じてそれを語る人の在り方の実体が問題とされていることは明らかである。そのようなことは一つにはギリシアの戯曲からの伝統でもあろう。

第二は、美学文学的領域である。この概念の発祥地である古代ギリシアにおいては、この概念は具体的な形では、或は生ま生ましい形では、むしろ

る戯曲の中で、展開され生かされていた。つまり、この概念は、ただ論じられていただけではなく、自覚的に生きられていたのである。勿論この概念が自覚的に生きられるには、いくつかの方式が考えられるが、そのうちの一つをもっとも徹底化してかつ近代化して具現したのが、F・シュレーゲル、L・ティーク、F・ゾルガーなどを中心とするドイツ・ロマンティークの場合である。彼らはこのアイロニーを人間生活の最高理想となし、これを彼らの芸術家としての生活において追求し具現したのである。つまり、アイロニーは、彼らにおいて、芸術上のさまざまな表現要素（例えば、事件、環境、境遇、性格など）の中に客観化されると共に、他方、アイロニーは創作や批評の芸術上の態度や作家や詩人や批評家の芸術家としての立場そのものを規定するものとなったのである。しかしここで注目すべき重要な点は、アイロニーは、言語表現、或は、対話の場面のみで問題となるような性質のものであるだけでなく、人間の「生き方」という場面で問題となる性質のものであることが示唆されている点である。この故にアイロニーは哲学的世界観の立場にまで達する性質をもっている。

第三は、哲学倫理的領域である。すでに述べたところからアイロニーはこの領域において語られ問題とされる性質のものであることは間接的に推測されるであろうが、確にアイロニーが語られ問題とされる領域は究極的な意味においてはこの領域である。ソクラテスは勿論のこと、彼を常に念頭においてアイロニーについて語り問題としたプラトンやアリストテレスもアイロニーの問題が究極においては哲学—倫理学の領域に根ざしている問題であることをはっきり示している。またすでにドイツ・ロマンティークの詩人たちも直接にしろ間接にしろこのことを示している。しかしこのことを最もはっきり示した者は、むしろアイロニーそのものを全く否定する立場に立ったヘーゲルであったことは、そして彼がそれを否定する営みを通じてであったことは、何ともアイロニーに相応しいことであった。けれどもアイロニーが正しくこの領域の問題であることを示すための劃期

的な寄与をした者は、19世紀前半のデンマークの思想家たちであったろう。J・L・ハイペーア、P・M・メーラー、F・C・シベアン、そしてキルケゴールである。つまりこれらの人々においては、アイロニーは、形而上学的意味と実存論的意味とをもったものとして扱われているのである。アイロニーは、彼らにおいて、自らが問題とさるべき最も正当な場所で問題とされることになったと見てよからう。

以上アイロニーという概念が語られ問題とされる学問的領域として三つをあげたが、そこで次に、これらの領域でアイロニーという概念が語られるとき、それらに共通するものとして何が問題となっているのかという本項の本来の問題へと入ってゆこう。

アイロニーという概念において問題になっている事柄は、極く一義的には、虚構（または虚偽）と真実との関係である。人間は、現存在や現実の個々の部分と関かわるときも、またそれらの全体と関かわるときも、決して直接に関かわるのではなく観念や概念や思想や信念などを通じて関かわるものである。そのため現存在や現実に対する人間の認識や態度や在り方の中ではつねに「虚構と真実」という問題が起ってきて、この問題はその人に無限に迫ってくる。しかしこの「虚構」と「真実」というものは、決して黒と白というように平面的に対置されて問題となっているのではなく、いわば仮面と正体というように極めて立体的に遡及的に問題となってくるものである。つまり、仮面がはがされ正体が暴露されるという仕方である。アイロニーという概念においては、つねに、このような「虚構と真実との関係」が問題になっているのである。しかし問題はこの「虚構と真実との関係」という問題において更に何が問題になっているのかという点である。それは、端的に言うならば、「真実」というものにおける「否定的契機」或は「否定性」が問題になっているのである。言い換えるなら「真実」というものは「否定性」を通じてのみ成立しうるものであり、この「否定性」が問題になっているのである。この「否定性」は、弁証法において、論理

的運動の一契機としてとらえられているが、アイロニーは、その「否定性」がそのように浅く甘いものではないということを示し、この「否定性」そのものを「問題化」するのである。つまり、アイロニーにおいては、その「否定性」はつねにどこまでも遡及的、徹回的、逆説的な運動をする契機であることが問題化されるわけである。この意味においてアイロニーにおいては、「無化」の運動が、「無」そのものが問題になっているのである。

「無」は、何ものを通じてよりも、アイロニーを通じて、その正体をもっとも露わにする。つまり、アイロニーは、「無」が「虚構」の自己産出性であると共に自己崩壊性であることを露わにする。従ってアイロニーは、「虚構」に身を託している人間に、その「虚構」をどこまでも「壊滅」（無化）してゆく契機として働きつづける。しかしまたこの故にこそアイロニーは、人間に、^{まさ}正しく否定的、間接的な仕方ではあるが、匿名の「真実」なるものへと関かわることをどこまでも迫ってゆく契機でもある。

このようにアイロニーは、人間がたえず「虚構」から「真実」へと立ちかえらせられるための導びきの糸であり、実存をするにあたっての必要不可欠の条件である。アイロニーは、人間に向って、現存在、或は、現実の一切を、一度は「アイロニーの相の^{もと}下に」ながめることを要請する。

2. キルケゴールにおけるアイロニー理解の特徴

キルケゴールのアイロニー理解に関してはさまざまな特徴があげられるが、ここではそれらの中のほんの一点についてだけ述べておくことにする。それは彼が「アイロニー」をとらえているその構図についてである。それは端的に言うならば、彼においては、「アイロニー」は大きく二つのものとして対応的にとらえられているということである。それは「世界のアイロニー」Verdensironi と「個々のアイロニー」den enkelte Ironi である。この両者の対応関係は彼の「アイロニー」理解におけるもっとも大きな構図であると言ってよい。しかしそのような莫とした大きな構図の中で、実

のところ彼において最も色濃く真に基本的な図式をなすものは、これらの対応関係とは次元を異にしたところから「世界のアイロニー」への対応をなす「主体のアイロニー」の関係である。つまり、「世界のアイロニー」と「主体のアイロニー」との対応関係である。まずわれわれは、これが基本的構図をなしていることを予め知っておくことが必要であろう。そこで今ここではこの両者の言葉の意味だけを簡単に説明しておこう。

1. 世界のアイロニー

キルケゴールにおいてアイロニーとは丁度空気のようにどこにまでもつきまとっているものである。この意味において世界のアイロニーとはアイロニーの極めて大寫した絵画的表現と言ってもよい。しかしこれは二つの面をもっている。

一つは、外からふりかかってくる、或は、外からやってくるアイロニーのことである。今ここに一人の人がいてその人の語ったものがアイロニーである場合、そこには、何かどきんとびっくりする契機、期待していなかったことの契機がある。その契機は、人が普通につもりとしていることとは反対のことが語られた際のその「反対の関係」の中にあるわけである。そこでそのような意味での「反対の関係」において何かを笑いものとし嘲笑する場合にそのものの偶発性がその対象となっている場合、或は、普通に期待していたことやそのつもりで身構えていたこととは思いもよらないことや全く反対のことがその人にふりかかってくるような出来事がその対象となっている場合、それらは「運命のアイロニー」と呼ばれる。ところでこの「外からふりかかってくる、或は、外からやってくる」という性格をもっと拡大した意味にとらえ、それを「個々のアイロニー」に対するものとしてとらえるとき、それが「世界のアイロニー」と呼ばれる。⁽²⁾

しかしもう一つの面として、この視点は、キルケゴールにおいては、日常の世界から、世界史の全体に妥当するに至るまで拡大される。つまり、アイロニーの概念が世界史の発展過程の全体に対して適用されるのである。

キルケゴールは、それをヘーゲルの照明の中で行ない、イデーは進歩してゆくところの偉大なる過程としてとらえ、イデーと現実との関係に適用している。即ち、彼も、何か新しいものが「前に進み出で」、旧きものを征服するとき、一つの与えられていた発展段階はそれに続く発展によって「嘲笑される」という見解に立っている。キルケゴールは、ヘーゲルにおいて「世界のアイロニーが極めて正確にとらえられている」となし、ヘーゲルの言葉に即して次のように言っている「あらゆる個々の歴史的現実はいずれにせよ、つねにただイデーの現実化における契機にしかすぎないので、それはそれ自らのうちに没落への萌芽を蔵しているのである⁽³⁾」と。要するに、世界のアイロニーは、イデーと現実との、また現実とイデーとの関係において発現するものである。

世界のアイロニーとはこのような二つの面をもったものである。けれどもキルケゴールは自分のいう「アイロニー」はヘーゲルの体系の中でその席を与えられているあの「否定的契機」とは全く異質のものだと言う。そのことは「主体のアイロニー」において明らかである。

2. 主体のアイロニー

「主体のアイロニー」という言葉はとくにあるわけではなく、即ち、それはキルケゴールの呼び名ではなく、彼はこちらの方はただ普通に「アイロニー」と呼んでいるのである。しかしそのように呼ぶのでは「世界のアイロニー」との関係がはっきりしないと考えられるので、その性質を買って「主体のアイロニー」としたわけである。

さて、世界のアイロニーというのは、結局のところ、イデーと現実との、また現実とイデーとの関係において発現するものであった。しかしこの関係に対しひとりの人間がイデーを実現するための主体として関係する場合その関係において発現するのがこのアイロニーなのである。彼はその関係においてアイロニーの主体となる。つまり、歴史の発展の中では、個々の人物が決定的な意義をもって登場してくる。つまり、ひとりの人間がイ

デーの実現をはかろうとするとき、与えられた現実（歴史的現実）は彼にとって何ら妥当性をもたない。なぜなら、現実には彼にとって不完全なものだからである。しかしさりとして彼は何か新しいものを持っているわけでもない。ただ彼は一つのことだけを知っている。それはこの現実にはイデーに対応してはいないということである。そこでアイロニーの主体である彼は何も立てることができない。否、彼はただ「否定性」としてだけありつづける。しかし彼は、その人間性、行為、存在そのものによって、否、そのアイロニーそのものによって、歴史の「転換点」となる。そして正にこの「転換点」においてにじみ出てくるものは、主体性の原理である。「人間」自身が「倫理的原理」そのものと化するのである。⁽⁴⁾ 彼がイデーと現実との関係に「主体」として関係しなかったならアイロニーは起らなかったのである。「主体」が「主体的に成ろうとする」ところにアイロニーが発現してくるのである。このようなわけで、キルケゴールにおいては、アイロニーは、主体性の原理としてとらえられているのである。

以上キルケゴールがアイロニーを大きく二つに分けて考えていることを述べた。この両者の関係への更に突込んだ説明は本稿の末尾でするとし、ここではキルケゴールのアイロニー理解の特徴としてもう一つ付言しておきたいことがある。それは、本稿ではそれに触れるところには至らないが、それはキルケゴールが「アイロニー」を考える際、つねに「ユーモア」を前提とし、「ユーモア」との関係において考えているという点である。否、彼の「アイロニー」はすでに「ユーモア」に媒介されたものとしてあると言ってもよい。この意味において、本稿でも「アイロニー」がまるで肯定的契機のような印象をかもし出すであろうが、それは本質的に「ユーモア」に媒介されたそれを扱っているからであり、「ユーモア」との関係を伴っているという性格が、拭い去れないところから来るのである。

3. アイロニーの原理

キルケゴールはアイロニーを究明してゆくにあたって二段がまえの方法をとっている。まず最初は、日常的、通俗的、一般的意味でのアイロニーをとりあげ、その本質を究明し、これを手がかりとして次に彼が目ざすところの本来の意味でのアイロニーというものへと入ってゆく。彼は前者を「言いまわし」Talefigur、「話法」Talemåde、「話し方の形式」Taleformとしてのアイロニーと呼び、後者を「すぐれた意味における sensu eminentiori」アイロニーという言葉で呼んでいる。そこでこの論述も一応この二つに分けて進めてゆこうと思う。⁽⁵⁾

1. 話法としてのアイロニー

普通極く一般にアイロニーという言葉が使われるのは人間同志の会話にあたって言葉の「言いまわし」「話法」もしくは「話し方の形式」に関してである。だから誰しも「アイロニー」とは要するに「話し方」に関する問題なのだと考えている。キルケゴールが「アイロニー」の問題を扱うにあたって、まずその領域のアイロニーをとりあげたことは至極当然である。しかし彼がこのアイロニーをとりあげたのは、これのなかに彼が目ざす本来の「アイロニー」にまで内通する本質規定を見出そうとするためである。

彼はこの「話法としてのアイロニー」の中に三つの規定を見出している。

第一は、「現象は本質でなく、本質の反対である」という規定である。⁽⁶⁾人間がものを言うとき、思想や意見が本質であり、言葉が現象である。そこで例えば人が演説などでいわゆるアイロニー的な話し方をするとき、そこにまず認められる特徴は、その語り手が内心考えているのとは反対のことを口にする点である。否、天才タレイランは、「人間は、自分の思想を表明するためにではなく、それを隠すために、言葉を語るということをしてきた」とまで言っている。このことは本来の「アイロニー」にも通じる特徴を意味している。

第二は、「語る主体」(語り手) に関してであるが、「主体が否定的に自由である」という規定である⁽⁷⁾。ここで「語り手」が二つの語り方をする場合のことを考えてみるとよくわかると思う。即ち、一つの場合は、その人が自分が今語っていることがらは正しく自分の意見であり、そこに言い表わされていることは自分の意見の全く適切な表現であるということ意識しているとき、しかも自分が語りかけている相手はそこに言い表わされた自分の意見を完全に受けとっている想定するとき、その人は自分が言い表わしたことに拘束されていることになる。これに反してもう一つの場合は、その人が言い言わしていることが自分の意見ではない場合、或は、自分の意見と反対のものである場合、その人は、他人との関係においても、自分自身との関係においても、自由である。ところでアイロニーにおいては、後者の場合のことが起っているわけである。

第三は、「それ自身を止揚する或る種の高貴性」つまり、優越感ということである⁽⁸⁾。アイロニー的な話し方は、語り手が自分の言うことを相手が理解すると予想しているときには、それ自身を止揚する。例えば、真剣に考えていもしないことを真剣に言うことはアイロニーの最も一般的な形式である。つまり、そこで語られる言葉は極度に真剣なものであるが、事情をよく知っている聞き手は、その背後に潜んでいる秘密によく通じている。それは出されたとたんに解答がわかっている謎のようなものである。ところがこの「止揚」ということの中にはアイロニーのもう一つの性質が入り込んでいる。それは相手に「理解されたいとは思いつつも、だからといってそのまま直接的には理解されたくないと思うところからでてくる或る種の高貴さ」であり、「そのためその言い方は、誰もがすぐ理解できるようなすなおでまともな言い方を見くたすようになる。それはいわば高貴な人の^{しのび}微行の道中のようなもので、このお高くとまったところから、徒歩で行く普通の言い方を⁽⁹⁾憐みながら見くたす」のである。

キルケゴールはありふれたアイロニーから以上の三つの本質規定をひき

だしている。

次に彼はこのアイロニーの様相を、それが向っている相手の人々との関係において、更に言うならばそれが相手の人々を通じてアイロニー的に扱っている状況の全体との関係において、考察する。それによると、アイロニーは、二つの方式をとって現われているものだとす。

その一つは、アイロニーの語り手が自分がやつけようとしている思わしくないものと自分を同一化⁽¹⁰⁾する仕方である。例えば、今ここに一切のことに通曉しているという愚かな思い上がった知識がある場合、アイロニーの人は、次のようにすることは空虚で無内容であることをよく心得ているにも拘らず、彼はそれと同調するふりをし、この知恵のすべてにいかにも恍惚としているかの如くし、感激的な拍手かっさいをもっていやましにます狂気じみた仕方でひたすら高く高く高揚するようにそそのかすやり方である。つまり、このアイロニーの人は自分の感激のしぐさがまことに愚かしいことを百も承知しながら、天来のひびきのような歓声と賛歌をいやがうえにも高くひびかせてその思い上りをせり上げてゆくのである。ここで重要なことは、このアイロニーの人が相手がとらわれているのと同じ罠に自分もかかっていると見せかけることである。そしてそうすることによってアイロニーの人は、このような欺きに成功すればする程、そのような術策が上達すればする程、つまり、自分の欺きが相手に気づかれなければ気づかれない程、それこそが彼の最大の喜びとなるのである。

もう一つは、アイロニーの語り手が、自分がやつけようとしている思わしくないものと自分を対立関係⁽¹¹⁾におく仕方である。この場合も、自分の見せかけは自分自身が固執するものと反対のものたることをよく心得ていて、この食いちがいの喜びを享樂するという仕方である。例えば、前述のような溢れんばかりの知恵をもっていると思いつている者に対し、アイロニーの人が自分はいかにも無知で愚鈍だというふりをする場合である。しかもその上、素朴で、善意で、純真で、誠実ですなおな努力をして、自

分にとって謎であったものを虚心に理解しようとする態度がとればますますけっこうなことである。とにかくアイロニーの人がこのようにして食い違の喜びを享樂する場合である。この方式のもっと進んだものは、アイロニーが、知者たちを嘲弄するために、最も素朴で最も偏狭な人たちを選び出す仕方である。

さて、キルケゴールはアイロニーのこのような二つの発現方式を通じて、アイロニーの三つの機能をとらえている。

第一は、アイロニーは他人の正体を暴露させる働きをする。アイロニーは確に世間をとらえ、その世間の眼をくらませるが、それはアイロニーの人自身が姿を隠すためよりもむしろまず他人の正体を露わならしめるためである。

第二は、しかしアイロニーは周囲の人々に対し自分の足もとをくらす働きをする。それはやはり自分自身を匿くす働きである。しかしそれは単に「身を隠くす」ことではなく、一種の瞞着であり擬装のようなものである。

第三は、アイロニーは、そのようなあらゆる諸関係に煩わされない自分自身の「初め」の可能性を、つまり主体的な自由を、享樂する働きをする。言い換えるなら、主体がまだ自由であることを否定的に享樂するのである。

キルケゴールは以上の三点を把えている。

さて、既に指摘したように、今までのところで扱われたアイロニーは、日常的、或は通俗的意味でのアイロニーであり、そのアイロニーの現象形態であった。そこで彼は以上の成果を手がかりとした上で、次にいよいよ目ざす本来の「アイロニー」、つまり、「すぐれた意味における sensu eminention アイロニー」の分析へと入ってゆく。

2. すぐれた意味におけるアイロニー

まずキルケゴールが本来目ざしているこの「すぐれた意味におけるアイロニー」とはいかなる場合、或は、状況において発現するアイロニーを指

すのかこの点から説明してゆこう。キルケゴールは、この「アイロニー」は前述したアイロニーとは質的に区別されるものとなし、次のように言っている。「『すぐれた意味におけるアイロニー』は、あれこれの個々のものごと dette eller hint enkelte Tilværende に向うものではなくて、或る一つの時代に或るもろもろの関係のもとで与えられている現実全体 hele den til en vis Tid og under visse Forhold givne Virkelighed に向うものである。それ故このアイロニーは自らのうちに先験性を有しているのであって、現実の一片を次々と継続的に壊滅させてゆくことによって自分の全体観に達するのではなく、この全体観の力によって個々のものにおいて破壊をするのである。このアイロニーが『アイロニーの相の下に』sub specie ironiæ ながめるものは、あれこれの現象ではなく、現存在の全体 Tilværelsens Totale である。」と。要するに、アイロニーというものを「現実と主体との関係」という視点から見るとき、先述のアイロニーは、個々の現実、あれこれの個々のものごとに向うものであり、この「すぐれた意味におけるアイロニー」とは、現実全体、現存在の全体に向うものである。この意味においてキルケゴールは、このアイロニーを、「純粹なるアイロニー」den rene Ironi 或は「立場としてのアイロニー」Ironi som Standpunkt と呼んでいる。これは正に「立場」としてのアイロニーであり、更に別の言い方をすれば「在り方」そのものとしてのアイロニーである。⁽¹²⁾

さて、キルケゴールがこのアイロニーの本質について述べるにあたって、まず、まっさきに問題になってくるのは、元来アイロニーとは全く無関係でありながら、このアイロニーが呈するもろもろの現象と極めてまぎらわしい類似現象である。そこでキルケゴールは、かえってその類似現象との判別を通じながらこのアイロニーの本質を間接的に指摘してゆく方法をとっている。ところで彼はこの作業をすすめるにあたって、このアイロニーが発現する際にとる形態を大きく二つに分けて、それぞれの考察に入る。

一つは、その実行的もしくは執行的側面で、彼はこれを実行的アイロニー en executiv Ironi と呼び、もう一つは、理論的もしくは静観的側面で、これを静観的アイロニーと呼んでいる。

(1) 実行的アイロニー

キルケゴールが実行的アイロニーの考察を通じて究明しえたアイロニーの本質は次の二点である。⁽¹³⁾

第一は、アイロニーは「擬装」ではないということである。アイロニーはしばしば「擬装」と同じものに考えられるが、アイロニーは次の二点において「擬装」とは全く別のものである。まず擬装は、現象と本質との食い違いを演ずる客観的な行為それ自体を指すものであるが、アイロニーは、それに加うるに、主体が、自らを生活関係の連鎖の中に閉じこめられているその拘束状態からアイロニーによって解放する際の主体的な享楽をも意味する。次に擬装は、それを主体との関係において考えてみるに、それは或る意図というものをもっており、しかもその意図は外的な意図で、擬装そのものとは無縁なものであるが、アイロニーは何かほかの意図というものはもっておらず、アイロニーの意図はアイロニー自身に内在的なものであり、それは形而上学的な意図である。つまり、その意図とは、アイロニーそのものである。即ち、アイロニーの人は自らを別人の形で打ち出ししかも他人にそのように信じさせようとするとしても、にも拘らず彼の本来の意図は「自由だと感じる」ことである。そして彼は正にアイロニーによってそのようになるのである。このようなわけで、アイロニーは何ら他の意図をもたず自己目的 Selvhensigt である。

第二は、アイロニーは、「偽善」ではないということである。デンマーク語ではアイロニーは時々「ごまかし」Skalkagtighed とも訳され、偽善者は「人目をごまかす者」Øienskalk と呼ぶのがつねであるが、両者は全く異なる。なぜなら、偽善は、悪人であるのに善人に見せようとするので、偽善は本来は道徳的領域に属するものであるが、アイロニーは、この逆の

場合もあり、しかしそれより以上に、自分が実際にそうであるのとは別のものに見られようとする事だけに意をもちいるので、アイロニーは形而上学的領域に在るものである。

(2) 静観的アイロニー

キルケゴールは静観的アイロニーの考察を次の三つのまぎらわしい類以現象との判別を通じて行な⁽¹⁴⁾ってゆく。

第一に、アイロニーは、「嘲弄」、「諷刺」、「愚弄」等々ではないということである。アイロニーを一つの従属的契機とみなすなら、アイロニーはこの人世における歪んだもの、逆さまのもの、むなしいものを見る確かなまなざしである。ところで、アイロニーがこれらのものをとらえるとき、前述の三つのものと同じものと思われがちになる。否、一般にはその三つのものがアイロニーだと考えられがちである。しかし全くちがうのである。アイロニーはその観察したものを演出する際に違いがでてくるのである。つまり、アイロニーは、むなしいものを壊滅させてしまうのではなく、また正義が邪悪に対するときのように罰を下すのでもなく、はたまた喜劇的なものがもっているような宥和的なものを身につけているのでもなく、むしろ、アイロニーは、むなしいものをそのむなしさにおいてもっと強め、狂ったものをますます狂ったものにしてゆくのである。即ち、アイロニーは、ばらばらな諸契機を、より高次の統一においてではなく、より高度の狂気ざたにおいて調停しようとするものなのである。

第二に、アイロニーは、「懐疑」ではないということである。アイロニーは、現実全体、現存在の全体に向うとき、現象と本質の対立という規定を保持することにより、絶対的否定性として関係していることになるので、懐疑と同じものに思われてしまう。しかし両者は次の四点において全く異なるのである。まず、懐疑は概念規定をするものであるが、アイロニーは主体性の対自存在である。次に懐疑は本質的には理論的であり、懐疑にとっては事柄が問題であるがアイロニーは本質的には実践的であり、アイロニ

一にとってはアイロニー自身が問題である。つまり、アイロニーは現象の背後に現象のうちに存するものとは別のものの存在を見ぬいたとしても、アイロニーのたえざる関心事は、主体が自らを自由と感じているということであって、現象が主体にとってどうやっても実在性をもつに至らないことである。第三に、懷疑においては、主体はたえず対象の中に入り込もうとするのであり、彼の不幸は対象がたえず彼から逃げてゆくということであるが、アイロニーにおいては、主体はたえず対象から抜け出そうとするのであり、そして彼はこのことを対象が彼にとって実在性をもたないということであらゆる瞬間に自覚することによってなしとげるのである。第四に、懷疑においては、主体は、本質はつねに現象の背後にひそんでいるにちがいないという理由からあらゆる現象が悉く壊滅されてゆく侵略戦の証人であるが、アイロニーにおいては、主体は、自分自身を救い出すために、即ち、自分自身を一切のものからそれを否定的に独立した状態のうちに保持しておくために、たえず退却をし、あらゆる現象からその実在性を言挙げ^{ことあ}げしてしまうのである。

第三に、アイロニーは「信仰心」Andagt ではないということである。アイロニーは、現存在は実在性をもたないということを知覚することや、すべてがむなしなものだということを知覚することにおいて、信仰心と似た面をもっている。しかしその場合両者は次の点において全く異っている。信仰心においては、まず第一に、それにとってはより低い現実が、即ち「世界の関係」がその妥当性を失うが、そのことは、それと同じ瞬間に「神の関係」が絶対的実在性を主張するということが起っている限りにおいてのみ起るわけであり、従って、すべてがむなしということも、この否定によって一切の虚飾的なものが取り除かれて、永遠に存在するものが現われてくる限りにおいて、起るわけである。第二に、敬虔にみちば信仰心は、すべてがむなしということがわかる時、自分自身の人格を決して例外とはせず、そのなかに含め、それ故、その人格さえもまた、神的

なものがその人格の反抗によって押し返されることなく、信仰心によって開かれている心の中に注ぎ入ってくるように、取り除かれなければならないものなのである。敬虔な心というものは、自分自身の有限的な人格を一切のうちで最もみじめなものと考えている筈である。これに対してアイロニーにおいては、すべてのことがむなしいとされることによって、主体性が自由になるというところに決定的な相異がある。即ち、一切がむなしいものとなればなる程、主体性はますます軽く、ますます無内容に、ますます移ろいやすくなる。こうして一切がむなしいものになってゆくのにアイロニーの主体はそれ自身むなしくなってゆかないで、おのれ自身のむなしさを救い出すのである。このように、アイロニーにとっては、一切が無となるのである。

キルケゴールは「アイロニー」の原理をこのように間接的に指摘したが、彼は更に進んでアイロニーがそこから発現してくる形而上学的根拠について述べる。

2. アイロニーの基底

キルケゴールによるなら、アイロニーは結局のところ現存在の「無」から発現してくるという。もちろんその「無」はアイロニーにとってそうなったものであるが、にも拘らず現存在は本質的に「無」なのである。彼は次のように言っている。「アイロニーにとっては一切が無となる。しかし、無はいろいろな仕方で捉えられることができる。思弁的な無は、具体化が行われる各瞬間ごとに消滅してゆくものである。なぜなら、その無自体は具体的なものの衝動であり、具体的なものの創造本能 *nisus formativus* だからである。神秘主義的な無は、表象にとっての無なのであり、だからそれは、丁度夜の沈黙が聞く耳をもつ者には大きい声でものを言っているのと同じように、実に内容豊かな無なのである。ところで最後にアイロニーの無は、そこにアイロニーが幽霊のようにたえず、立ち戻ってきては出沒しおどけまわる *spøger* (この最後の言葉は完全に二重の意味にとられている)

死の^{しじま}静寂である」と。キルケゴールはアイロニーの形而上学的根拠をこのように述べている。これによって彼は、アイロニーが一切のものを無へと還元する働きのものであることを指摘しているのである。しかし、にも拘らずその無化の働きの中には主体性との関係が隠されているのである。

キルケゴールはこのようにしていよいよ「アイロニー」の定義へと入ってゆく。

4. アイロニーの定義

キルケゴールは、アイロニーについての彼の定義を、マギスター学位論文『アイロニーの概念について——たえずソクラテスを顧みつつ——』の冒頭に掲げた15の論文テーゼの中の第8番目のテーゼで、はっきり述べている。それはこうなっている。「アイロニーは、無限にして絶対的な否定性として、主体性のもっとも軽くもっとも微かな^{しる}徴しである。」*Ironia, ut infinita et absoluta negativitas, est levissima et maxime exigua subjectivitatis significatio.*⁽¹⁵⁾ この定義は、よく検討してみるならば、アイロニーがもつ四つの面を同時的に述べている。事実われわれはキルケゴールの著作や日誌類を見るときに、確に彼はアイロニーを四つの面に分けて考えていることを知らされる。ところでその四つの面というのは、アイロニーが関かはる四つのものとの関係に対応したものである。その四つのものとの関係とは、まず第一は、現存在との関係であり、次は、主体との関係であり、もう一つは、他者との関係であり、更にもう一つは、アイロニーそれ自身との関係である。そこで彼の定義を考察するには前述のテーゼを一応この四つの関係に即して分析し、そのそれぞれについて究明するのが妥当であろうと思うので、以下そのようにしてすすめてゆく。

1. アイロニーは無⁽¹⁶⁾限にして絶対的な否定性である。

キルケゴールにおいてはアイロニーは、現存在との関係の面においては、このように定義される。即ち、彼においては、アイロニーは、何よりもま

ず「否定性」として、否「否定性」そのものとしてとらえられている。この意味は、アイロニーは、あれこれの特定の対象を否定するものという意味ではなく、対象そのもの、現存在そのものを否定するものという意味である。しかしこの「否定」ということの意味は、いわゆる直接的な意味での否定ということではなく、それにおいて現存在の全体が、或は、現実全体が、主体性に対して実在性をもたなくなる、主体性に対してその妥当性を失うこと、という意味である。つまり、アイロニーにとっては一切が無となるということである。即ちそれは、「現存在全体がアイロニーにおいてある主体にとって無縁になり、またこの主体が現存在にとっても無縁になっているということ、また現実がアイロニーにおいてある主体にとって自らの妥当性を失うことによってそのアイロニーにおいてある主体が或る程度まで非現実的になっているということ」なのである。

しかしそのことは具体的にどのようにして行われるのかというに、キルケゴールによるなら、それは、アイロニーの二様の働きによってであるという。

一つは、現象がイデーに相応しないということを示すことによって現象を壊滅させ、イデーが現象に相応しないことを示すことによってイデーを壊滅させるということによってである。言い換えるなら、イデーと現実との、また現実とイデーとの食い違いを際立たせることにおいて、そして、可能性と現実性との、また現実性と可能性との食い違いを際立たせることにおいてである。

もう一つは、このような働きの更に深い意味になるが、「むなしいもの」をそのむなしさにおいてますます強め、より高度の狂気ざたにおいて調停することによってである。

このような意味をこめてキルケゴールは、アイロニーの「無限にして絶対的な否定性」という本質について次のように言う「それは否定性である。なぜなら、それはただひたすら否定するだけだからである。それは無限的

である。なぜなら、それはあれこれの特定の現象を否定するのではないからである。それは絶対的である。なぜなら、アイロニーがそのものの力によって否定するところのその当のものは、決して現に存在はしていない或る高次のものだからである。アイロニーは何ものをも立てない。なぜなら、立てらるべきものはアイロニーの背後にあるからである」と。このようにして彼はアイロニーの「無限にして絶対的な否定性」を「神的な狂気」「神の嫉妬」と呼んでいる。なぜなら、アイロニーは、単に偉大なるものや秀いでたものに対してだけ嫉妬をもつのではなく、微賤なるものや取るに足りないものに対しても同じだけ嫉妬するからである。つまり、それは現存在の全体を「無限」にして「絶対」的に否定するからである。「無限」と「絶対」は、神の属性である。

キルケゴールはアイロニーの一つの意味をこのように理解するが、彼は、アイロニーのこのような規定が世界史の過程において妥当するとなす。つまり、彼によるなら、世界史的な転換期というものはいずれの場合をとってみても或る程度までは今まで述べてきたような構成をもっているという。そして彼はその一例として宗教改革に最も近い時代の人物例をあげている。しかしその場合キルケゴールはこの事柄の意味の深遠なることを示すために、二つの類語を使っている。即ち、その「構成」という言葉として Formation という言葉を使っておき、それを直ちに宗教改革という言葉 Reformation にひきつぐことによって、それが「再構成」になることを示唆している。ところで、その人物例として、カルダヌス、カンパネラ、ブルーノをあげ、更に、ロッテルダムのエラスムスも或る程度までアイロニーであった、と言っている。

さて、アイロニーの「無限にして絶対的な否定性」は、単なる否定性ではない。それは現存在の全体を無たらしめるものである。従ってそのようにしてなった無も単なる無ではない。それは何かを示している。キルケゴールは次のように言う「一切がむなしくなることによって、むなしくなれ

ばなる程、主体性はますます軽く移ろいやすくなって来る」と。その無には全く見えない仕方で主体性との関係が隠されているのである。ここにおいてわれわれはアイロニーのもう一つの面にふれることになる。

2. アイロニーは主体性の規定である。⁽¹⁷⁾

アイロニーは、主体との関係の面では、現存在との関係の面におけるとは逆の仕方で機能する。確かに、一切がむなしくなることにより、むなしくなればなる程、主体性はますます軽く移ろいやすくなって来る。しかしこのことが主体にとっては「自由」という感じになるのである。なぜなら、そこには主体に内容を与えるべき現実はないし、与えられた現実が主体をその中にとらえておく拘束から主体は自由だからである。しかしまたこのようであるからこそ、アイロニーにおいては、主体は否定的に自由である。なぜなら、アイロニーにおいては、一切がむなしくさせられ、一切がむなしくなるのに、主体の方はむなしくなりっぱなしにならないで、おのれ自身のむなしさを救い出すからである。このようなわけでその自由は浮遊的である。しかしこの自由こそがそのアイロニーの人に或る種の恍惚とした感激を与える。なぜなら「彼は可能性の無限性に酔うているからであり、また滅びゆく一切のものについて何らかの慰めを必要とする限り、彼は可能性の莫大なる予備資金の保護をうけることができるからである。」けれども、アイロニーにおいてある主体は、この感激に身を委ねることはしない。この感激は、その主体のうちにひたすら無化してゆくことの感激を鼓吹しはぐくむのである。つまり、アイロニーの主体はその否定的に自由であることをたのしむのである。

このことは、キルケゴールによるなら、世界史の中で、極めてはっきりと認められる。即ち、彼によるなら、アイロニーの主体は、与えられた現実をその与えられた現実そのものをもって壊滅させるわけだが、その場合、それと同時に新しい原理が彼のうちに可能性として現存しているわけだから、彼はそのアイロニーの行為によって「世界のアイロニー」に奉仕して

いることになる、と言っている。この件に関してキルケゴールは、ヘーゲルの『哲学史』第2巻62ページの次の言葉をひき合いに出し、それにおいて「世界のアイロニー」は極めて正確に把握されていると絶賛している。その言葉とはこうである。「すべての弁証法は、妥当すべきものをあたかも妥当するかのように妥当させ、それにおいて内的崩壊をおのずと発展させる——世界の普遍的アイロニー。」

キルケゴールによるなら、あらゆる個々の歴史的現実には、いずれにせよ、つねにただイデーの現実化における契機にしかすぎないのであるから、いかなる個々の歴史的現実もそれ自身のうちに没落の萌芽を蔵しているのだと言い、このことはとりわけ過沍の契機においてははっきり認められるものとなし、その代表的な事例としてユダヤ教の場合、とくにユダヤ教の中におりながら、その没落とキリスト教の到来をつげる洗礼者ヨハネの場合をあげる。キルケゴールが言うところは次のようなものである。レビ記第26章3節以降に示されているように、律法が^{いましめ}誠命を告げた後に「もしあなたがたがこのことを行なうなら、祝福されるであろうという」約束をつけ加えたとき、それはすでに世界に対する深いアイロニーであった。なぜなら、そのことによって、かえって、人間はこの律法を完全に行なうことはできないものであること、従って律法を完全に行なうことを条件に与えられることになっていた祝福はもはや仮定上のものでもすらない全く手のとどかないものになってしまったこと、正にこのようなことが示されることになったからである。しかしユダヤ教がおのれ自身をおのれ自身によって無に化したということ、このことは正にキリスト教に対するその歴史的関係によってこそ示されたのである。われわれは、たとえキリストの出現の意義については特に深い吟味はしなくても、従ってキリストの出現を単に世界史における転換点としてだけとらえるとしても、そこにアイロニー的な構成を認めざるをえないであろう。なぜなら、そのアイロニー的な構成は、実に洗礼者ヨハネによって与えられているからである。彼は決して「来る^{きた}

べき者」ではなかった。彼は来るべきものについては知ってはいなかった。しかも彼はユダヤ教を無に化せしめたのである。彼は、ユダヤ教に、ユダヤ教自身が与えようと欲していたものを、つまり、神による義を、逆に要求したのである。ところが、ユダヤ教はそれを与えることができなかった。そのためにユダヤ教は没落したのであった。つまり彼はユダヤ教を存続するにまかせ、同時にそのうちにその没落の萌芽を発生させたのである。しかし他方洗礼者ヨハネの方にあつては、彼の人格性はすっかり陰のうちに入ってしまった、彼においては、人はあたかも「世界のアイロニー」の客観的な姿を見るようなものであり、それ故彼は「世界のアイロニー」の手にあるただの道具にしかすぎないものになってしまうわけである。

さて、このようにキルケゴールは、ユダヤ教に対する洗礼者ヨハネの中にアイロニー的構成の顕著な例を見ているが、ここで注目すべき極めて重要な事項は、今述べた終りの方の部分の言葉でも明らかなように、キルケゴールは洗礼者ヨハネに対して同時に一つの批判ももっているのである。それは、洗礼者ヨハネにおいては、アイロニー的な構成が展開されているにも拘らず、おかしなことに彼の人格性はすっかり陰に入ってしまった、彼はただ世界のアイロニーの手中にある道具にしかすぎなくなっているという点である。これは実に重要なポイントである。キルケゴールは、その件に関し、それは洗礼者ヨハネにおいては、アイロニー的構成が完全には展開されていないとなし、そこで彼は、アイロニー的構成が完全に展開されるための条件について述べる。それによると彼は、洗礼者ヨハネはアイロニー的な構成のうちにあるながら、しかもそのアイロニーについては自覚をもっていなかったところに原因があると見ているようである。彼は次のように言っている。アイロニー的な構成が完全に展開されているためには、主体は同時に自らのアイロニーを自覚していなければならず、与えられた現実を断罪することによって自分を否定的に自由と感じ、そしてこの否定

的な自由を享樂しているのではなければならない。しかしこれがなされうるためには、主体性が発展させられていなければならない。つまり、主体性が自らを主張する際に、アイロニーが姿を現わすのである。主体性は、与えられた現実^に直面したとき自分自身を感じ、自分の力と自分の妥当性と意義とを感じるものである。しかし主体性は、それを感じる際に、その与えられた現実が主体性をその中にとらえておこうとした相対性から、いわば自分自身を救い出すのである。ところでこのアイロニーが世界史的に資格付けられているものである限りは、その主体性が自らを救った行為は、そのアイロニーの主体がそれとははっきり意識していないとしても、イデーへの奉仕においてなされているのである。このことこそが正当な資格をもったアイロニーにおける天才的なものである。正当な資格をもたないアイロニーについては、「自分の命^{いのち}を救おうとするものは、それを失う」という言葉があてはまる。けれども、アイロニーが正当な資格をもたされたものであるのかどうかについては、ただ歴史だけが審判を下すことができるだけである。キルケゴールはこのように言っている。

要するに世界のアイロニーと主体との関係はこうである。もし主体が世界のアイロニーのうち^にありながらそれをアイロニーとしては知らずにイデーの実現に忠実であろうとするならば、その歴史的使命は充分果せるとしても、人格性（主体性）は消失し、世界のアイロニーの手中の一つの道具となってしまふ。しかしこれとは反対に、それをアイロニーとしてはっきり自覚し、かつ自らがアイロニーの規定のもとで主体性を主張し、自らがアイロニーの主体となり、その自らのアイロニーをはっきり自覚するならば、そのアイロニーの主体は「ひそかに世界のアイロニーと同じ作戦をもくろむことができる」というのである。つまり「彼は、既存のものをそのまま存続させる。しかしそれは彼にとっては何の妥当性ももってはいない。にも拘らず、彼は、それが彼にとっていかにも妥当性をもっているかのように、そのまま存続させておく。そして、このような仮面の下で、彼はそ

れをそれ自身の確実なる没落に向ってゆくよう導いてゆく。アイロニーの主体が世界史的なものとして資格付けられているものである限りは、天才的なものと芸術家的な思慮の深さとの統一が存在する。」と

アイロニーがこのような意味で主体性の規定であるならば、「主体が否定的に自由であることを享樂する」ということは、単なる無色透明の抽象的出来事ではなく、それ自体「倫理的なもの」もしくは「価値」の問題と関係があることがわかるであろう。そこでわれわれはこの辺からアイロニーの更にもう一つの面について考えよう。

3. アイロニーは真実なことの⁽¹⁸⁾あるしるしを意味する。

今まで述べられた二つの定義からは、一見するところ、アイロニーは極めて透き通ったものという印象がもたれるであろうが、しかしそれにも拘らずそれらの説明の中にもたえずアイロニーはその存在自体が極めて間接的な仕方ではあるが、また極めてほのかにではあるが、何かをその背後に控えていることが感じられるであろう。その背後に遠くほのかに、否、そこからは全く筋道のつけられない仕方で控えられているものは、いわゆる形而上学的「実体」、或は超越的「存在者」ではなく、キルケゴールにおいては、「倫理的なもの」とされている。J・ヒンメルストルップは、「古典的な意味におけるアイロニーの概念の^{しるし}徴は『透明性』Gennemsigtighedであるが、キルケゴールにおけるアイロニーの概念の徴は『不透明性』Uigennemsigtighed⁽¹⁹⁾である。」と言っているが、これは大へん興味深い分け方である。しかしもっと正確に言うなら次のように表現すべきではなからうか。アイロニーは、哲学的概念であるのみならず、同時に倫理学的概念であると。なぜなら、アイロニーの実体は本質的に透明であり、透明であろうとすることこそその本質であるが、アイロニーの存在はそれが価値の問題としての意味をおびているからである。

さて、このような視点から見るとき、アイロニーは「真実なこと」Alvorがあることを指標する^{しるし}徴かなしるしである。

デンマークの語にも他国語に充分翻訳することのできない沢山の言葉がある。その一つに ^{スボイ}Spø^オg ^{アルボーア}og ^{つい}alvor という対の言葉がある。直訳をするなら、spø^{スボイ}g は「宜談、ふざけ」であり、og は「と」であり、alvor は「本気、真面目、厳粛、真剣」ということになる。従ってこれをただつなぎ合わせるならば、何ら変哲もない意味になろう。ところがこの言葉は一つの「対句」としてデンマーク人が、日常はもちろん、あらゆる哲学的、倫理的、文学的著作の中で、必ずと言ってよい程用いる特別な言葉なのである。これは或る意味では、デンマーク人の思考様式を表わすもの、基本的なカテゴリーとして自覚化されてしまっているものと言ってもよい位である。そこでそのようにして使われるときこれが意味しているものは、spø^{スボイ}g は「本気になってはならないもの、究極においてはあしらわれるべき性質のもの」という意味であり、alvor は「厳粛なるほんとうのことがら、人間がそれに対してだけは真剣となるべき真実のことがら」を意味するのである。この意味においてこの後者は、人間が倫理的情熱もしくは真剣さをもって関かはるべき真実のことがらということになる。この対句に対してはキルケゴールも一応このような意味にとっているが、彼の場合は更に徹底化して使っている。

ところで、この対句を以上のように理解するならば、日常的、平面的理解を想定するなら、アイロニーはさしずめ spø^{スボイ}g に属するものとなるが、キルケゴールは、そのような日常的、平面的前提に対しアイロニカルな切り込みをかけ、アイロニーは究極においては alvor を指標しているしるしであるとなすわけである。彼の『哲学的断片後書』では次のように述べている。「誰か或る一人の人をソクラテスのアイロニー的な会話の一つに居合させてみよう。もしその人がずっと後になって誰か他の人にその会話を伝えるならば、しかしアイロニーだけは省いて、こんな話しがアイロニーなのかそれとも Alvor なのかは、ただ神のみ知り給う、と言うとするなら、その人は自分自身を皮肉っていることになる。そもそも、アイロニー

が存在するからと言って、そのことから、だから Alvor は締め出されているのだということにはならない。そんなことを思いこんでいるのは大学の先生方だけだ。⁽²⁰⁾このような意味から、キルケゴールは、アイロニーを、彼の「段階理論」の中で位置付けようとする。彼は『哲学的断片後書』の中で、アイロニーを、「美的なもの⁽²⁰⁾と倫理的なものとの間の境界線、或は、境界領域」となしているわけである。つまり、アイロニーは、正に、人格性の美的内容に対してか、或は、倫理的内容に対してか、いずれかの側に加わることができることになるが、キルケゴールにおいては、アイロニーの人は、絶対的要請に対して人格的に関かわることにおいて、そして無限性の運動を為してきていることにおいて、倫理に生きる人であると共に、他方では、そのように倫理に生きる人は、アイロニーを、自分の^{インコグニト}微行者（或は、匿名者）として、つまり、表現形式として、用いることができる、ということになる。この意味において、キルケゴールは、「ソクラテスはこの意味において倫理に生きる人であり、いわば、宗教的なものへの境界線まで倫理的に生きる人であった」と言っている。キルケゴールは、1846年、ヨハンネ・スクリマクスという偽名で、『哲学的断片後書』を書いたが、この偽名著者をして、アイロニーに関し一つの間いを発せさせている。「もし人がソクラテスをアイロニーの人と呼び、〔1841年の学位論文にみられる〕マギスター・キルケゴールのようにではなく、意識的にか無意識的にかただソクラテスの一面にだけ眼をむけようとするならば、そもそもアイロニーとは何なのか？ アイロニーとは、倫理的^{かかわり}要請との関係の中で自分の自我を内面性において無限に強調する倫理的^{かかわり}情熱と、自分の自我をあらゆる他の有限的なものや個々のもの^{かかわり}の間^{かかわり}にあってひとつの有限性をもったものとして、多面性において無限に抽象するところの教養的努力との統一なのである。⁽²¹⁾」と。つまり、アイロニーは倫理的 Alvor の最高の表現としての個人の主体的内面性を意味するのである。

4. アイロニーは内面性の運動である。⁽²²⁾

アイロニーはそれ自体が一つの運動態であり、弁証法的運動をしているものである。しかしそれは無限なる運動であって、この無限なる運動は、具体的には、アイロニー自身の「隠蔽性」 Skjulthed, つまり「自らをどこまでも隠す性格」としてあるところのものである。そしてこの「隠蔽性」こそが真の意味における「内面性」であるが、われわれはこの「隠蔽性」という特徴を先述のキルケゴールの定義、即ち「アイロニーとは自分の自我を内面性において無限に強調する倫理的情熱と、自分の自我を外面性において無限に抽象する教養的努力との統一である」という言葉にはっきり認めることができる。というのは、後者の運動は、前者の運動が片鱗だにそれを示す目じるしになるようなものをのこさないようにさせる運動であり、そこには技術があり、それによって前者を真に無限化することが条件づけられることになる。これで明らかのようにアイロニーは、自らが契機づけたところの倫理的情熱をも、それが本来の無限性を貫徹しうるために、その片鱗だに目じるしとなるものは隠蔽してしまおう働きをするものである。キルケゴールは『おそれとおののき』の中で、アイロニーについて次のように言っている。「アイロニーはよりよきものを隠すために使われるものである」と。キルケゴールは、この部分に関し、草稿の方では、次の文章を書いていたのである。それはアイロニーのこの意味を一層はっきり知らせてくれることになるので、引用しておこう。

「福音書の一つに二人の息子についてのたとえ話が物語られている。その一人は父親の意志を行うことをたえず約束していたが、それをしなかった。もう一人はたえず否を言っていたが、それをしたのである。この後者はまたアイロニーの形式でもある。そしてやはり福音書はこの息子を称讃している。福音書はまたその悔い改めた息子の方を、彼が否と言ったがためにそのことが彼を悔い改めさせることになったのだというように仲裁をしているわけでもない。決してそうではなくて、福音書は、その息子に父の意

志を実行しますと言うのを妨げる働きをしているものは一種の謙遜さであるということを暗示しているのである。より深味のある人間であるならこの謙遜ということを知らずにすまずことはできないはずである。謙遜というものは或る点ではその根拠を自己自身に対する高貴な不信の中にもっているものである。なぜなら、人が要求されたことを為さない限りは、言うまでもなくその人はそれを為しえないために確に弱い者であり得ることが可能だったからであり、それ故その人は何かを為すことの約束をしようとはしないのである。⁽²³⁾」

さて、アイロニーが本質的に「隠蔽性」であること、これは別の言葉で言うならば、アイロニーのもつ無限なる遡及性、徹回性、逆説性の運動であることは明らかであろう。しかしこの性質は、キルケゴールにおいては、「真理」の性格を示しているものなのである。キルケゴールにおいて「真理」とは、正にそのような弁証法的運動において関かわれている何ものかなのである。キルケゴールにおいては「真理」とは本質的な内面性であり、隠されたもの、無限に永遠に隠されてゆく性質のもの、そしてその故にこそただ信じられるだけのものである。アイロニーは、自らの本質である無限なる遡及性、徹回性、逆説性を内実とした「陵蔽性」を通じて、「真理」の性質の一面をほのかに指標しているのである。

以上アイロニーについての四つの定義について考察してきたが、それは結局は最初に述べた「論文テーゼ八」にまとめることができるであろう。しかしキルケゴールは『哲学的断片後書』の中でそのテーゼの意味するものを全く別の言葉で述べているので、そしてそれは同じ一つの「アイロニー」についての言葉として前者のそれと表裏相補う意味のものとして考えられるので、まとめの意味からもここに引用しておこう。

「アイロニーは実存の規定である。だから人がアイロニーは話し方の形式であると信じたり、また著作家が自分を自分はときどきアイロニー的な表現をしているのだと悦に入っていたりするときほど笑うべきことは他にな

い。本質的にアイロニーをもっている者はお天頭さまのつづく限りアイロニーをもっているのであり、何らかの形式に基いているのではない。なぜなら、アイロニーとは彼のうちにおける無限性だからである、⁽²⁴⁾

さて、キルケゴールはアイロニーをこのように定義したが、アイロニーにおいても「否定」しきれないものが一つある。それはおのれ自身の「優越性（優越感）」である。このゆえにこそ、アイロニーとはもっとも本質的には「無限にして絶対的な優越性」の逆説的運動ということができる。

5. 世界のアイロニーと主体のアイロニーとの関係

それでは最後にまとめの意味からも世界のアイロニーとの関係について述べておこう。⁽²⁵⁾

世界史についてのキルケゴールの理解は、既に述べた通り、極めて強くヘーゲルの影響をうけている。彼は一応世界史はイデーの実現の過程であるという前提にたつ（ただ「イデー」というものについての考え方は大へん異っているが）。そこで、キルケゴールは、イデーがそれ自体において具体的である限り、イデーにとっては、それがあるところのものにたえずなっていくことが、即ち——具体的になることが、必然的である、となしている。しかし彼は、イデーが具体的になることができるのは、必ず、世代と個々の人間を通じてである、となし、ここから二つのアイロニーの関係を問題にしてゆく。

キルケゴールによるなら、世界史が発展していく際、そこには「矛盾」が存在している。それは、その際そこに与えられている現実、かつては「妥当性をもった現実」であるが、今では「妥当性をもたない現実」となっていることにより、そこでは一つの現実が別の現実と衝突をしていることになるからである。そこでここに世界史における深刻な悲劇と犠牲が起るとなす。或る一人の個人の場合を考えてみるに、彼は世界史的に資格づけられたものであったとしても、同時にそれが現実によって保証をうけな

い場合がありうる。その場合彼は、後者である限りは犠牲をうけなければならない。しかし前者である限りは、彼は勝利しなければならない。この矛盾はどうなるか。ここに悲劇が起る。彼は犠牲となることによって勝利しなければならないということが起るわけである。しかしキルケゴールは、世界史の発展においてより真なる現実が進出する際には、必ずその現実はそれ自身、既に過ぎ去った現実を尊重する。それは革命でなくて進化である。つまり、過ぎ去った現実が、それが犠牲を要求することによって、自らがいまなお世界史的に資格づけられていることを示し、新しい現実が、それが犠牲をもってくることによって、自らが世界史的に資格づけられていることを示すのである。しかしそこには犠牲がはらわれなければならないのである。なぜなら、そこには文字通り現実が、一つの新しい契機が進出することになっているからである。つまり、その新しい現実が、過ぎ去った現実の単なる帰結ではなく、それ以上のものを自らの内容としており、また過ぎ去ったもののための単なる修正ではなく、同時に一つの新しい始まりだからである。とにかく、歴史上の転換期とはこのようなものである。従ってそこにははっきりと二つの運動が存在していることに注目しなければならない。それは、一方では新しいものが進出しようとし、他方では旧いものがとってかえられようとしていることである。

ところで、キルケゴールは、そのような歴史上の転換期には、新しいものが進出するその運動をめぐって、二種類の人物が登場する可能性があるとなす。

一人は、予言者の人間である。この予言者の人間は、新しいものを、はるか遠くに、全く不明のぼんやりした形で、見ている。彼自身は来るべきものを所有しているわけではなく、ただ予感しているだけである。彼はそれを言い張ることはできず、しかも彼もまた彼が属する現実にとっては妥当性を失われた者である。けれども、現実に対する彼の関係は、平和的な関係である。なぜなら、与えられている現実が彼に対して何ら対立を感じ

はしないからである。

もう一人は、これが彼が言うところの本来の意味での悲劇的英雄である。悲劇的英雄の特徴は、新しいもののために戦う点にあるとなしている。彼は自分にとって消滅してゆくものであるものを無化しようと努力する。しかし彼の任務は、無化すること自体よりもむしろ新しいものを主張して、それによって間接的に過ぎ去るものを無化することである。しかし他方においては、古いものがとってかえられることになるので、古いものはそのままの不完全さにおいて見られなければならない。ところで、キルケゴールは、この悲劇的英雄においてアイロニー的な主体に出会うという。つまり、悲劇的英雄はアイロニーの人なのである。

この悲劇的英雄はアイロニーの人であるから、彼にとっては、与えられた現実の妥当性を全く失っており、その現実はいかなるところでも邪魔ものである不完全な形式になっている。しかし他方、彼は新しいものも所有してはいないのである。彼はただ一つのことだけを知っているだけである。それは現にあるものはイデーに相応してはいないということである。こうして彼は審判を司る者としての位置についてしまう。アイロニーの人はもちろん或る意味では予言者的である。なぜなら、彼はつねに何らかの未来的なものを指し示しているからである。けれども彼はそれが何であるのかは知らない。彼は予言者的ではあるが、彼の態度や状況は予言者のそれとは反対のものである。予言者は自分の同時代と手をたずさえてゆき、この立場から来るべきものを見るのである。予言者は自分の同時代にとっても失われたものであるが、それは実のところ彼は自分が見ているまぼろしの中にひたりぎっているからなのである。これに反して、アイロニーの人は、自分の同時代の隊列から踏み出しており、それに立ち向っているのである。来るべきものは、彼にとっては隠されており、彼の背後に横たわっているが、彼が敵対的な態度をもって直面する現実には、彼が無化（壊滅）することになるものであり、彼はその現実に対して食い入るようなまなざしを向け

ている。自分の同時代に対する彼の関係は、キルケゴールによるなら、「使徒行伝」第5章9節の「見よ、あなたの夫を葬^{ほおむ}った人たちの足が、その^{かど}門口にきている。あなたも運び出されるであろう」という言葉を適用することができるという。アイロニーの人は、世界の発展が要求するところの犠牲である。しかしそのことは、アイロニーの人はつねにより一層厳密な意味において犠牲として死ぬ必要があるというような意味でなされるのではなく、世界精神に奉仕するその熱心が彼を食いつくしてしまうのである。キルケゴールはここで「ヨハネによる福音書」第2章17節の言葉を暗示している。それはイエスが宮潔めの場面で牛や馬を追い出し、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえしながら、はとを売る人々に「これらのものを持って、ここから出てゆけ、わたしの父の家を商売の家とするな」と言ったことに対し、弟子たちが思い出した旧約聖書のある言葉である。「あなたの家を思う熱心がわたしを食いつくすであろう」と。アイロニーの人とはイデーに奉仕するその熱心が彼を食いつくしてしまう人のことである。

さて、キルケゴールは、ここで歴史の転換期にはつねに「アイロニー」が存在していることを述べており、その際その歴史の発展に寄与する人物として「アイロニーの人」の登場の可能性を述べているが、にも拘らず、彼は人が「アイロニーの人」になるべきことをすすめているわけではない。彼がその件について人々に訴えようとしていることは次の2点と考えられる。

第1は、このアイロニーをはっきりと自覚せよということである。もし人がこの「アイロニー」を知らずして、歴史の中におどり出る者は、この「アイロニー」の餌食になるからである。つまり、その者はアイロニーの本質である「優越感」の餌食になり、その故にこそアイロニーの第1の規定である「無限にして絶対的な否定性」に、即ち「神の狂気」「神の嫉妬」に狂うものとしてこの地上に自らの存在の場所をもたないことになるだろ

うからである。しかもそれは何らイデーに奉仕することなくである。この意味においてこのアイロニーを自覚した者は、ソクラテスのように、たとえ犠牲になっても歴史に、イデーに奉仕することになるであろう。しかしアイロニーを真に自覚した者は、ソクラテスをも越えることができるであろうというのがキルケゴールの訴えである。

そこで第2は、アイロニーをはっきり自覚することにより、アイロニーの奴隷になることなくアイロニーを支配し統制しうるアイロニーの主人になれということである。即ち、アイロニーを「統禦された契機」として用いる主人になれということである。しかし問題はそれがどのようにして可能かということであるが、彼はそれをなしうるものとして「ユーモアの立場」を示唆している。もちろんその「ユーモア」はキルケゴールにおいては普通に理解されているユーモアとは全く異った実に深い意味のものである。「ユーモア」は「アイロニー」に対して、アイロニー的に対応し、それを更に深いものに化することによって「優越性」と「狂気性」を逆転解消し、真実なもの前にたちはだかっている最後の壁を溶解するのである。「ユーモア」は倫理性よりも宗教性との関係を指標しているものなのである。彼においては、世界のアイロニーとの関係において、悲劇的英雄はアイロニーの人であるが、予言者はユーモアの人であり、前者よりより高次のものとして考えられている。

キルケゴールが訴えようとしていることがらは以上の2点と考えられるが、にも拘らず彼は只管アイロニーを強調しているかの如き印象を与えるのは、彼自身の精神的体質によることは言うまでもないが、しかしやはり、彼が「アイロニーの相の下に」キリスト教界や神学思想や哲学思想をながめるとき、それらは余りにもアイロニーの自覚以前のものとして見えたがためであろう。(1970. 7)

註

- (1) ここではアイロニー研究史と研究文献全体を開陳する余白をもたないが、雑誌論文はともかくとして、アイロニーだけをテーマとした単行書は、極めて少ない。筆者は別の機会に、その作業を試みるつもりである。
- (2) S. V. XV. S. 760-1.
- (3) S. V. XIII. S. 363.
- (4) Ibid. S. 363.
- (5) この項は J. Himmelstrup: S. Kgds Opfattelse (Kbh. 1924) S. 38-9 の分類法についての示唆に従っている。
- (6), (7), (8), (9) S. V. XIII. S. 347-8.
- (10), (11) Ibid. S. 348-51.
- (12) Ibid. S. 354-4.
- (13), (14) Ibid. S. 354-8.
- (15) Ibid. S. 107.
- (16) Ibid. S. 311-2.
- (17) S. 362-8.
- (18) S. V. VII. S. 138, 263. 493.
- (19) S. V. XV. S. 616.
- (20) S. V. VII. S. 138.
- (21) Ibid. S. 493.
- (22) Ibid. S. 493.
- (23) S. Kgds Papirer. IV. S. 247.
- (24) S. V. VII. S. 494.
- (25) S. V. XIII. S. 259-61.

S. Kierkegaards Verständnis der Ironie

Hidehito Otani

Résumé

Diese Abhandlung stellt sich die Aufgabe, die grundlegende Hauptlinie in S. Kierkegaards Verständnis der Ironie aufzufinden. Seine Definition über den Begriff der Ironie kann man in „Theses“ seiner Magister-Dissertation „Om Begrebet Ironi med stadigt Hensyn til Socrates (Kbh. 1841)“ finden. Er schreibt: *Ironia, ut infinita et absoluta negativitas, est levissima et maxime exigua subjectivitatis significatio.* Aber sein Verständnis der Ironie vertiefte sich immer tiefer danach. Ich glaube also, man kann das bei vier Thesen vorstellen.

1. Die Ironie ist die unendliche und absolute Negativität.
2. Die Ironie ist die Bestimmung der Subjektivität.
3. Die Ironie ist das Zeichen der Tatsache, dass die Wahre ist.
4. Die Ironie ist die Bewegung der Innerlichkeit als die Charakter der Wahrheit.

Ob man sich der Existenz der Ironie nicht bewusst ist, steht man da unter der Herrschaft der Ironie: die unendliche und absolute Negativität als der göttliche Wahnsinn. Kierkegaard zuredet uns also, sich die Ironie bewusst zu sein, und dadurch die Ironie zu beherrschen. Aber er andeutet, es ist dadurch möglich, auf dem tieferen Standpunkt Humor zu stehen.